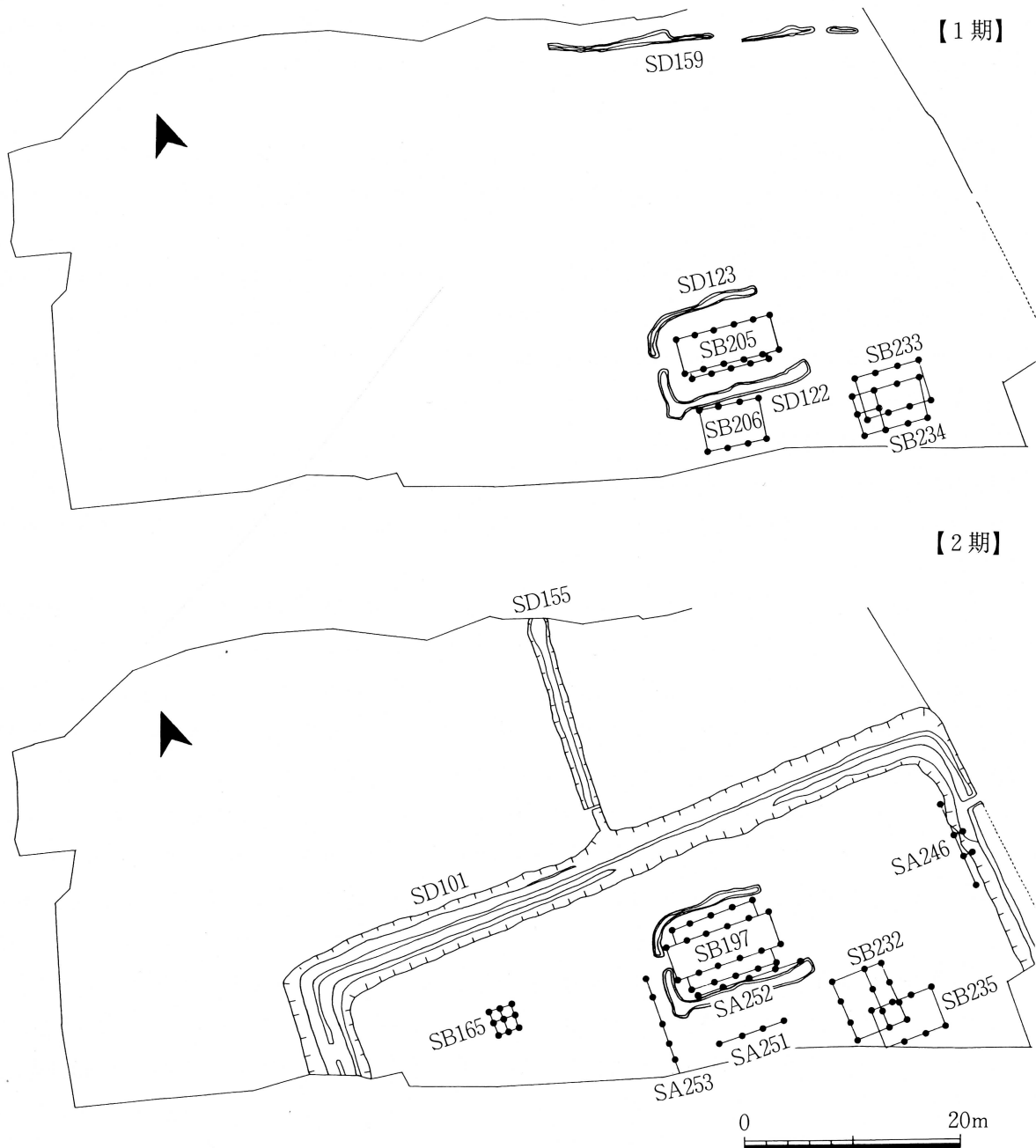


を東殿として3棟から構成される。前小期の柱列等には変化がないと推定されるが、新たに主殿S B 197の南土廂前面に柱列S A 252が東西方向に近接して付設される。その接近性に若干違和感を覚えるが、あるいは南孫廂的施設としてS B 197に取り付く可能性もある。

2期の堀跡のうち、S D 155は早く埋没しており、S D 101の方が堀深いなどにより、おそくまで開口していたと推定できる。この前提に立てば、2-b期以前にS D 155は埋没してその機能を失い、一方、S D 101に付随する施設S A 246は2-b期にまで存続したと考えられる。

### 3、仙人西遺跡発見の方形居館をめぐる二、三の問題

#### (1) 遺構期区分と変遷



第48図 仙人西遺跡居館遺構変遷図

はじめに方形居館の成立する2期について考え、次に1期の成立について検討する。方形に圍繞する堀埋土中から15世紀代を中心とする陶磁器・陶器・土師器が出土している。これらはいずれも16世紀代には降らないものである。さしの状態の中国銭の埋納は15世紀前半代に、以後、中葉にかけて居館の生活が展開していったものと考えられる。2-b期は降っても15世紀後半代には、機能を停止したと考えられる。以上から、1期の成立は15世紀前半代を含めたそれより前となるが、その上限は不明である。ただし、14世紀に遡る遺物は1期の遺構はもとより、他の遺構群からも発見されていないので、その可能性は薄いと思う。

発掘によって、仙人西遺跡は15世紀前半代に、北上川旧河道に北面する水沢段丘縁辺部に成立・展開した居館跡であることが判明した。

1期は居館（居宅・屋敷と同義に使う）の成立期で、この段階の外界との区画施設は、北面する自然地形の段丘崖と、この縁辺に並行して溝を掘り、板塀とする施設だけで、堀は伴わない。また、周囲の区画施設は北面する板塀だけで、発掘した範囲では西側の空間地からは何も検出されず、建物配置は主殿を中心に集合性が認められるものの、全体的には開放的印象を受ける。また内部を区画する柱列もみられない。

2期は堀を伴い、外界と区画される方形居館の成立期である。また内部は1期にみられなかった柱列による塀や大垣などで区画される。しかし堀に付随して土塁や柵列は構築されなかった。ただしすでに述べたように、建物配置や付属棟、空間構成上からも、この時期が居館としてもっとも整備される段階である。1期から2期に移行する過程で、この居館の主が小規模な屋敷構えから方形館造営者に成長していたことを窺わせる。主殿などの建物配置は基本的に1期を踏襲するが、1期の集合型はくずれ、主殿を中心に柱列で区画して前庭部的空間を創出し、その左右に付属棟を配するなど堀の内部における宅地割りに計画性が窺われる、整然とした配置構成となる。

## （2）遺跡の性格について

建築の構造を見ると、梁行1間に共通するように1・2期ともに大きな変化はなく、比較的単純、シンプルな構造である。それは建物配置においても同様で、主殿・東殿は同一場所で建て替えられている。ただし、主殿の1期土廂は、2期には南・北2面となり、廂の出も広がる。これは主殿の建物としての格が上昇していることの現われであり、それは、外界と区画する堀の掘削に対応した現象と解される。

堀は方形プランで北辺は堀底の狭まる薬研堀状だが、東西両辺北寄りの仕切り遺構より南側は堀底が広い箱堀となり、浅くなる。仕切り遺構の土手状の構造及びその存在から、居館を圍繞する堀に用水機能を求めることは困難である。ただし、北辺堀の下半部の礫層はグライ化しており、それは、もっとも深い北辺堀からの排水施設が認められず、雨水などで溜った水は排出されず、帯水状態にあったことを示す。また堀に沿って居館を圍繞するような土塁や柵列も構築されておらず、2期における方形居館が軍事的意味での防御や遮断施設としての機能を堀にもたせたと考えることはきわめて困難である。むしろ、堀から得る筆者の印象は、掘削の計画性、左右対称性、仕切り遺構を境とする明確な堀底の段差、仕切り遺構自体の化粧性（装飾性）などから、堀そのものの視覚的効果を意図して造作されたもの<sup>14)</sup>と考える。ここに居館形成における外界との隔絶性演出のための堀の掘削の意義を認め得る。つまり、2期の居館では上述の見地から「堀」が重要な役割を果たしていることを指摘できる。

14) 大平 聡「堀の系譜」（佐藤 信・五味文彦編『城と館を掘る・読む—古代から中世へ—』山川出版社、1994年）P P. 57～89. でも同様の指摘がある。

隔絶性の象徴としての堀の出現と、中心殿舎の整備が2期の特徴である。また、物理的防御施設を備えないということも、本遺跡の特徴の一つである。その意味では、居館の開放的性格は1・2期を通じて認められるが、2期に現われる隔絶性という堀にこめられた精神的意義は大きかったと考えられる。

ところで、1期にみられる建物配置は、当地方にも類例が<sup>15)</sup>みられ、在地有力者層（上層あるいは有力農民、さらには富裕層といわれる階層と同義に使う）の居宅と考えられる。おそらく1期の段階は、当地方の各地域で周辺田畠を中心に経営の主体者として生産活動をはじめた階層の台頭があったと考えられる。

2期になるとさらに仙人西遺跡のように、在地社会で成長を遂げ、方形居館を構える階層と、おそらくは従前の階層にとどまるグループ、さらには没落し他の階層に吸収されるグループなどに分化していくと推定される。2期の方形居館を構える階層をここでは土豪層（在地に勢力を張る有力者の総称で、「在地有力者層」よりは上位の概念）と呼ぶ。後述のように、地域の封建的支配下にあつて、これら土豪層が自らの武士団を組織していたかどうかは、若干疑問のあるところである。むしろ、性格的には1期以来の有力農民層としての要素の方が強いと考えられる。そのことは居館を経営するに際しての防御・遮断施設の欠落に端的に現われていると解される。

### （3）歴史的 성격に関する考察—城館ネットワーク論—

中世の当地方は、奥州藤原氏滅亡後、鎌倉幕府の直轄支配地となり、御家人葛西氏の所領ともなった。葛西氏は平泉に居館を構え、氏の有力家人の柏山氏を金ヶ崎町大林城（柏山館）に、江刺氏を江刺市岩谷堂に地頭などとして配し、胆沢・江刺郡支配の拠点とした。<sup>16)</sup>柏山氏は胆沢地方にあつて在地領主化し、譜代老臣である三田・大内・蜂谷氏などを小領主として前沢や水沢に配し、地域の分割支配を図った。

中世前期後半から中世後期になると、かつての鎌倉御家人の在地領主化が明確になり、また恩賞としての土地の領知化が進行し、小領主層の分割支配が一層細分化されてきた。15～16世紀には完全に在地領主化した柏山氏は、このような歴史的状況の中で、在地支配機構を再編しながら、胆沢地方を領国化し、一代権勢を築いた。

ほとんど独立丘陵に近い西根段丘に立地する柏山氏の居館は大林城（柏山館）と呼ばれ、西郭の松本館、東南郭の生城寺館、主郭で北郭の三郭からなる総称とされるが、1970年から95年までの都合5次にわたる発掘調査によって、主郭から東に延びる低丘陵館山地区にも遺構の存在が確認され、室野秀文氏の分類による主要郭3～4郭以上で構成される大規模な多郭構造に相当する拠点城館である。<sup>17)</sup><sup>18)</sup>

15) 水沢市跡呂井中陣場遺跡は北面する水沢段丘崖から南へセットバックした平坦面にあり、仙人西遺跡とまったく似た立地を示す。遺構は掘立柱建物で中央部の2間×3間の東西棟を中心にして、前面に東西方向の柱列を、東側に北に1間の間仕切りのある2間×3間の南北棟を、西側に西に1間の間仕切りのある2間×3間の東西棟を配するもので、その構造と構成がよく似ている（伊藤博幸・佐久間賢ほか『水沢市神明町跡呂井中陣場遺跡現地説明会資料』水沢市教育委員会、1979年）。

また平成8年度に実施された水沢市林前I遺跡は、水沢段丘沖積面微高地上にあり、ここから、15世紀代の1基の井戸を含む、東西棟（1×3間）、南北棟（2×3間）の掘立柱建物跡3棟が検出されている（水沢市埋蔵文化財調査センター調査）。

16) 以下、当地方の中世の概観は伊藤博幸「(五) 胆江地区概観」(草間俊一・司東真雄・本堂寿一編『岩手県中世城館分布調査報告書』岩手県教育委員会、1986年) P P. 153～172. に拠る。

17) 室野秀文「中世の城館と近世初頭の城—北奥を中心に—」(『第17回岩手考古学会研究大会発表資料』岩手考古学会、1996年) P P. 1～18.

18) 中村英俊・小山内透ほか『松本館跡発掘調査報告書—一般県道永沢水沢線改良事業に係る発掘調査—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第256集（(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1996年）P P. 1～245.

詳細は報告書に譲るが松本館の大規模な版築工事による土塁の構築、館山地区における主要建物数棟と付属建物、井戸とを一単位とする数ブロックの宅地割りの存在など、土木工事の労働量を考えただけでも、他を凌駕する施設である。15世紀に整備され、16世紀前半に完成したと推定される。

仙人西遺跡の北西方にある白井坂 I・II 遺跡は水沢段丘縁辺部を利用した平坦部に立地する居館跡で、堀と土塁で区画された小規模な5つの郭からなる。内部からは土塁のほかに、柵列跡、門跡、掘立柱建物跡が発見されており、15世紀前半～16世紀代に営まれたことが判明している。郭の数からいえば多郭構造であるが、規模など全体的特徴からは前掲室野氏の分類の準拠点城館に相当する。

ここでは拠点城館及び準拠点城館を構える階層を、在地領主層と呼び、土豪層の居館と区別したい。また城館を構えることのできた在地領主層でも、準拠点城館の方がより、地域社会に密着した小領主的階層だったと考えられる。このことから、中世後期には当地方において、在地領主層－在地小領主層－土豪層－在地有力者層の各階層が城館（居館・屋敷）ネットワークを形成しながら秩序付けられていたと考えることができる。ネットワークはある意味では領域内の階級的連合による百姓支配の形成であったともいえるが、ネットワークの形成過程では、土豪層と在地有力者層の階層が不安定であったことも確かである。ちなみに土豪層に比定される仙人西遺跡の方形居館主は16世紀にはここに存在しない。

土豪層のその後の軌跡は、社会的・政治的変化に対応して、より上位の階層に吸収されるか、あるいは武士化せず本質的要素である農民としての力量を発揮して、土着して在地有力農民となることなどが考えられるが、当地方では方形居館の系譜は方形の水濠をめぐらす「豪族屋敷」に引き継がれるという見通しをもっており、土豪層の一部は、豪農に転換した者もいたと推定している。<sup>20)</sup>

以上、城館ネットワーク論を述べてきたが、まだまだ論及しなければならない課題が多い。例えば基本的な問題である、当地方で方形居館がどのような系譜のもとに成立する<sup>21)</sup>のか、あるいは土豪層－方形居館主－の階級的横のつながり、さらには城館ネットワークの成立していく時期、等々である。これらについては稿を改めて考えてみたい。

19) 川村 均・杉沢昭太郎ほか『白井坂 I・II 遺跡発掘調査報告書－水沢東バイパス建設事業関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第248集（（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター，1996年）P P. 1～448.

20) 方形の水濠に囲繞される近世初期の豪農あるいは豪族屋敷の遺構については、さしあたっては伊藤博幸・池田明朗『十日市屋敷跡』（佐々木千鶴子・伊藤・池田ほか『水沢遺跡群範囲確認調査－平成7年度発掘調査概報－』水沢市教育委員会，1996年）P P. 12～41. 参照のこと。

21) 方形居館の問題については、橋口定志氏の論文を参照のこと。なお、橋口氏には資料提供で大変お世話になった。記して謝意を表す。

「絵巻物に見る居館」（『生活と文化』2号，1986年）P P. 26～39.

「中世居館の再検討」（『東京考古』5，1987年）P P. 133～160.

「中世方形館を巡る諸問題」（『歴史評論』454号，1988年）P P. 46～57.

「中世東国の居館とその周辺」（『日本史研究』330号，1990年）P P. 70～97.